

[レポート]

地域で生きるパフォーマーの話 vol.3

2014年2月19日(水) @ コンceptスペース F★E★P

語り手：あまる

[大道芸人、NPOしずおか大道芸のまちをつくる会 元会長／静岡県在住]

はじめに

全国をみわたしてみれば、自分がパフォーマンスをするだけではなく、自身が暮らしている地域に根ざした独自のスタイルで面白い活動を行っているパフォーマーの方々があちらこちらに見受けられます。このトークシリーズでは、その方々が関東に来るタイミングにお時間をいただき、地元での活動を中心に、考えていること思うことについてのお話を聞いたり、意見交換できる場をつくっています。

語り手の活動に関心のあるさまざまな方々に情報が届くように、またご参加いただけなかった多くの方々にもお話の概要を共有できればと、このシリーズでは当日のお話をもとにレポートを掲載して記録を積み上げていく事にしました。(ただし、その場にいた参加者たちとのライブな出来事とするために、質疑応答でのやりとりについては掲載しておりません。ご了承くださいませ。)

シリーズ第3回のゲストとしてお招きしたのは、静岡を拠点に活躍する、大道芸人のあまるさんです。NPO・しずおか大道芸のまちをつくる会(通称:しまる会)の代表(※注:2014年2月当時)として日常的な大道芸の活性化に取り組み、また地元と協力したお祭りや芝居小屋づくりにも携わるなど、視野の広い活動をおこなっているあまるさんの力強く熱いお話をどうぞお楽しみください。

Koen 企画 奥村優子



あまる Amaru (本名: 餘目 哲)

岩手県北上市出身の群馬県旧新田町(現太田市)育ち。静岡大学農学部三年次編入学を機に静岡県静岡市に移り住む。在学中に静岡大道芸サークル WAPS と出会い、入会。その後、静岡県内を中心に地域のお祭りやイベントに出演。大道芸ワールドカップ IN 静岡を知り、一期一会で笑顔や歓声が広がる大道芸の魅力にはまる。大学での研究職を辞してプロパフォーマーに転向、しずおか大道芸のまちをつくる会の中心的存在として様々なイベント企画を立ち上げ、現在に至る。演目はジャグリングを活用した観客参加型のコメディ寸劇をメインの看板とし、様々な物語を軽いタッチで演じ分ける。

○あまる公式サイト www.amarulabo.com

○しずおか大道芸のまちをつくる会 <http://shimarukai.org/>

本人からの 内容紹介

はじめまして。静岡県静岡市を拠点に、市街地での大道芸の活動支援や情報の発信、大道芸を軸にしたイベント企画などを行っているNPO「しずおか大道芸のまちをつくる会」の代表を務めております、大道芸人のあまと申します。

今回は私たちの12年間に及ぶ活動や、活動を通じて得た様々な出来事を主に、ひとつの街や場所を基地に構えた時のパフォーマーのあり方や可能性について、お話をさせて頂きたく思っております。

はじめに

本日はお集まり頂きありがとうございます。しずおか大道芸のまちをつくる会というNPOの現在代表をしております、あまと申します。

今日はこのNPOの活動に関してのお話をさせて頂きたいと思っておりますが、まずはじめに私がなぜ大道芸と繋がりが、どういうきっかけで始めていったかというところを掘り下げていって、そこから入っていききたいと思います。



自己紹介

私の生まれは岩手県の北上市というところです。親の仕事の都合で群馬県の旧新田町(現太田市)というところで20歳まで育てております。その頃は大道芸などのこういう演芸、生の芸に触れる機会は一切ございませんでした。

静岡に移り住んだのは静岡大学に編入学で入学してからでございます。毎年静岡では「大道芸ワールドカップ in 静岡」という大きな大道芸・サーカスのフェスティバルが行われているんですけども…このフェスティバルを知らないという方は今日の会場にはいらっしやいますでしょうか？

(ほぼ全員が知っているという雰囲気)

ありがとうございます(笑)。これは年に1回、11月の最初の週末に3~4日間、静岡市の町中を舞台に世界中の大道芸人、国内で活躍されている大道芸人が集結してものすごく町が活気づくフェスティバルなんです。

私が参加しているこのNPOが立ち上がったのも、このワールドカップがあったからというところが大きいんですが、まあそれはちょっと置いておいてですね。私の生い立ち、ではなく大道芸との出会いにちょっとまずフォーカスを当てさせてください。

大道芸との出会い

当時、静岡大学に編入したのはお話ししたとおりなのですが、3年次編入学をしたため…周りに友達がおられません。ある程度もう大学の空気が出来た中で、ごつーんとしていっていきたくてございます。これはまずいな、と。これはなんとかして大学に溶け込めないといけないな、という勝手な危機感がありまして。そうした時にサークルに入らなければならないという使命感に駆られて、サークルを渡り歩きました(笑)。

そんな中でですね、私ちょっと昔から趣味で日本のお手玉、おばあちゃんがやるようなお手玉をやっていたんです。このお手玉…ジャグリングをやっているイラストを掲げたポスターがありまして、それが「WapS」という静岡大道芸サークルだったんですね。それで、「あつ。ここならば私もなんとかかなあ」という思いで入会しました。

入会して「大道芸とはなんだろう」ということも全く知らないまま活動をしておりましたが、ご縁があって2週間後に早速フェスティバルで演技をしてくれという話がありました。でも私は本当になんかの免疫もなくて、どうしたら良いのか本当に思い悩んだんですが、せっかく頂いたチャンスなので「行きます！」とお答えしました。

その当時の私がお手玉以外にできたのは、けん玉。あとはサークルに入らせて教えてもらったシガーボックス(箱の曲芸で、箱を3つ並べていれかえたりするやつです)くらいのものでした。その覚えたてのけん玉とシガーボックスのちょっとした技、あとお手玉。この3つのテクニックを使って、はじめての大道芸のショーをなんとかやることになりました。

その会場の焼津市には札幌ビールの工場があって、イベント自体もサッポロビールのお祭りだったので、お客さんがみんな酔っぱらいなんですね。なので私なんて格好の餌食だった…と言いますか。「お前は何しに来たんだ」というような視線で皆さんに見られました。けれども、もちろん一生懸命やりました。もう訳がわからないんですけどね。どういものがショーなのか本当にわからないまま、とにかくできることを一生懸命やりました。

そうしたらですね、お客様が私に1,000円をくださったんです。最初は私、この意味がわからなかったんですけど、とにかくこれが「投げ銭」というものなんだ…ということ、あとで聞きました。

ショーをやって本当にドキドキはしましたが、お金が貰えるのか！とかなりの衝撃を受けました。「これは美味しいサークルに入ったなあ」というのが正直な、その当時の感想ですね。

その後は、その勢いに任せてジャグリングの世界、技をどんどん覚えていきました。玉だったら玉を増やしてどうやってやっていくのか？というのを先輩方のテクニクを見ながら学び、とにかくひたすら技術を磨く日々でございました。

大道芸ワールドカップの衝撃

そんな中、まだ当時の私は大道芸ワールドカップの存在も知りませんでした。当時は1999年です。でも、秋頃になるとサークルの空気がこう…ソワソワしだすんですね。みんな「そろそろワールドカップだ」という話をしている訳です。

でも私の中でワールドカップは98年のサッカーのフランス大会。あれ、去年終わったはずだよーと思っていたのですが、先輩方は当たり前のようにワールドカップの話をしていて、おかしい、何かがおかしいとは思ってたんです(笑)。

本当に、現場に立ち会うまで本当に、ほとんど知らなかったんです。そして始まったワールドカップは、これまで教えてもらった大道芸の世界を全力でひっくり返すようなフェスティバルでした。

そもそも皆さん…ワールドカップではなく、大道芸を見たことありますか。質問ばかりで申し訳ございませんが、大道芸を見たことがないという方はいらっしゃるでしょうか。

(全員観たことあるという雰囲気)

あつ、よかった。皆さん大道芸には免疫があるわけですね。お話を戻しますと、この当時の私は大道芸には本当に免疫がなくてですね、そのワールドカップにいきなり遭遇しまったわけです。

もちろんジャグリングとかはある程度知ってたんですけど、出演している芸人さんが皆、すごくドラマティックなんです。同じことをやっているようで、本当に1人1人全然違うことをされているんです。ドラマが確立されていて、もう見る人見る人本当に感動的で、これは私が半年間やっていた大道芸の常識が全部ひっくり返りました。

何がひっくり返ったかということ…今思い返すとなんですけれど、お客さんのわくわくした感じっていうんですかね。それから1年後のワールドカップに私も出たいなと、できることをなんとか駆使して出たいなと思いました。もちろん、これはプロの芸人さんが集まるフェスティバルなので、出演はなかなか難しいことです。しかし、大会にはオフ部門という当時までできたの自主参加部門がありました。

もちろん審査はあったんですけども、落とされたという話はその当時は聞いたこともありませんでした。「出せば通るよ！」という先輩の話を受けて申込書を出しました。そしたらですね、通っちゃったんです。

(なぜこういう話をしているかというといえます。今はこのオフ部門という自主参加部門も、出るのが非常に厳しい部門になっております。プロの方が、どんどんワールドカップに出ようとするものですから、その当時私が今のワールドカップに出会っていたら出ることはもちろんできなかったと思います。)

本当に素人の演者である私は、ジャグリング、練習しました。思いっきり。覚えてたのけん玉、シガーボックスとボール以外にもいろいろ。ちょっとポーズをしたりとか、拍手をもらう余裕とかを、なんとなく覚えながらやったわけです。

そしてはじめてのワールドカップ出演。

でも実際出演してみますと、1年前に私が感じたことと何かやっぱ違うんですね。それはお客さんが違うんです。

私は引っ越してからずっと静岡で暮らしていますので、普段の静岡というのを知っています。が、この4日間だけお客さんが明らかに違うんです。もちろん実際に静岡以外からもたくさん人が来ていたのかもしれないですけど、もう雰囲気が全然違うんです。お客さんの「これから楽しむぞ！」というそういう勢いが満ちているんです。演技をしているのはこちらだったんですけども、私はお客さんに圧倒されてしまいました。そして、これは一体なんなのだろうかと思ったんです。

もう1つの衝撃

そして、しる会の話をする前にもう1つ私の衝撃的な出会いについてお話をさせてください。そのワールドカップに初出演した時に同オフ部門に出ていた大道芸人で、稲垣あつきくんという人がいました。今は芸名が「番台屋謝辞」という名前なんですけど、私はこの稲垣くんと出会ってものすごい衝撃を受けました。

彼のやっているショーが、私の知っている大道芸の概念をまたひっくりかえしてくれたんですね。彼は、とにかくテンション高くお客さんを煽るんです。「やるぞやるぞー！」という感じで煽るんですけど、でも何をやっているかよくわからなかったんです。いや情熱はすごくあったんですよ。それで、一番衝撃的だったのはフィニッシュなんですけど、タイタニックのパロディで「パイパニック」という演目で、パイ投げをするんですね。このパイは、よくドリフがやってるやつですね、これを大道芸でパーツとやるんです。

まあここで話してネタバレしてしまうのもあれなんですけども、この「パイパニック」でショーが終わったことに、ものすごいショックを受けました。「こんな大道芸が許されるのか！」というのを強く思ったのと同時に勇気ももらって、大道芸の可能性を広げてくれたと思います。

その当時、やっぱり私は自分のジャグリングにそこまでセンスがないというか、そんなに上手じゃなかったんです。

勢いに任せてなんとか頑張っただけなんですけども「大道芸にはこういうあり方もあるんだ」というのを、この稲垣くんに教えて頂いた。これは本当に衝撃的な出会いで感謝しています。

そして彼についてももう1つ。今日、このあとお話を頂く本題に関わってくるのかな…と今振り返れば思うんですが、彼がその時に今度やるイベントのチラシを私にくれたんですね。それがどういうイベントかという「ホワイトエキスポ」というイベントでした。当時彼は大阪芸術大学を卒業したばかりだったと思うんですけど、彼が大学で勉強したことを結集したイベントのようでした。

ただ、チラシをみてもよく内容がわからなかったの、これはなんですかと聞いたら…これはちょっと女性の方はごめんなさい。

彼が言ったのは「ホワイトエキスポだからやっぱり白いものを展示する。白いもので一番情熱的なものは男性が射精してでも、精子を展示するんだ」というイベントだったんです。しかも、ただ精子を展示するのではなく、どうやって出したのか、どういうシチュエーションだったのか、そうしたものを展示するんだ、とすごく熱く語ってくれたんです。これには、本当に衝撃を受けました。

この話をラーメン屋でしてたんですけど、聞いている私がかかなり引いたくらいです(笑)。一緒にラーメン食べたけど、この人すごい人だなと思いました。だけど同時に、大道芸・芸人を名乗るからには、自分で自分が面白いと思ったものをかたちにして発信して良いんだな。ということ、彼から教わりました。こうやって振り返る機会を頂けたので、今思えばなんですかね。「なんで僕はこうなってるんだ？」を丁寧にほどいていくと、やはり彼との出会いは外せませんでした。

稲垣あつき(番台屋謝辞)くんに出会うことがあればぜひ、ホワイトエキスポについてお声かけくださいませ(笑)。

当時の静岡大道芸状況

いろいろ話が長くてすみません…。時系列にそってお話をするためにカンペのようなものを準備させてもらってはいるのですが、事情がややこしいのでもう1つだけ本題に入るまでお話しさせていただきます。

その稲垣くんとのお会いを経て、私はジャグリングの世界をいったん捨てて身体1つ…とは言わないまでも、ドラマが作れる芸を1からやってみよう一念発起して頑張りはじめました。

その当時の静岡では、ワールドカップが行われていない時期は大道芸を行う場所がほとんどありませんでした。そんな中で、ワールドカップのときのメイン会場の1つ「札の辻」と呼ばれる市街地の交差点で無許可＝ゲリラで大道芸をやっている彦一団子さんという先輩がいました。その方の習って、私もゲリラ大道芸をやってみようと思ったんです。



やっぱり、やりながら研究していかないとわからないと思ったので。本当に思いつきでどんどん自分にできることをひたすらやってみました。たとえばするめが入ったバケツを置いて、これを20分かけてひたすら、いかにドラマティックに食べるかとか。別に演劇の経験はなかったんですけども、とにかく本当に死に物狂いでドラマになる大道芸を作りたくて、毎週毎週いろいろと手を変え品を変え、いろんなやり方をジャグリングをしないでやろうと頑張っておりました。

しまる会の発足と経緯

このように、私が大道芸を始めた当時はもちろん無許可でやっていました。ヤクザや警察がいつきてもおかしくないという中でやっていました。お待たせしましたが、そういうところから本題の話に入らせて頂きたいと思います。

そういう状況をふまえた上で、時系列で申し上げれば、私が大道芸を始めた頃と時を同じくして「NPO しずおか大道芸のまちをつくる会」が発足しています。発起人は、先ほどお名前をだした大道芸人の彦一団子さん(今日は彦さんと呼ばせて頂きますが)でした。

この彦さんが「静岡に大道芸文化を根付かせて、1年中大道芸が見れる街にしよう」という目的でNPOを立ち上げます。私はその当時NPOには関わっていませんでしたが、この会にはいろいろと難しいところもありました。やはり静岡で暮らしている皆さんにとって「大道芸」と言えば、あの夢のフェスティバルのことを連想されるわけです。

この夢の4日間と日常の静岡とのギャップがあまりにもあってですね、この会が発足して「よし、みんなで大道芸をやるよ！」と集まってきたメンバーは、やはりワールドカップをきっかけに大道芸のファンになってきた方が多かったようです。すると、その夢と日常のギャップになかなか耐えられない。

活動を通してサポートしようと思っている芸人、例えば私とかですね。別に面白くないと。彼らが自分たちを応援するつもりは本当はなくて、実際できることもそんなになくて、正直に言えば多分そういうストレスもあったと思うんです。だからスタッフが会合で集まっても集まっても疲弊していくばかり、それぞれ1人1人夢を語るのはいいいのですが、その夢が1枚岩にならない。そこがNPOの最初の壁だったと思います。

これは2001年の1月20日の静岡新聞なんですけれども、当時はこれだけメンバーがいました。15~16人が賛同して、最初の会合に足を運んでくださったんです。1年後にはこのメンバーは殆どいなくなりました。さみしいですが、生みの苦しみと今は思っています。こういうところから会はスタートしております。



しまる会への参加のきっかけ

私がしまる会と直接関わりを持つようになったのは、とあるちょっとショッキングな相談がきっかけでした。

私たちは無許可で大道芸をやっていたものですから、NPOが大道芸の場づくりをしていく上では、ちょっと邪魔な存在だったかもしれないということなんです。ある時に「公的な機関に働きかけて道路使用許可をとるために、一度この無許可の大道芸をやめてくれないか」というお話をされました。

そのときに私がちょっとクエスチョンだったことがありました。「大道芸のまちをつくる会」の名前なのに、大道芸を潰すのかと…これは本当にショックでした。なんでこういうことになっているのかという段階になって、私は初めてこのNPO しずおか大道芸のまちをつくる会(この後は通称:しまる会と呼ばせてもらいますが)の会合に参加しました。それが発足から10か月後のことです。

その時に会合で目の当たりにしたのは、やっぱり想像したとおりと言いますか…。

「公的な機関と話をしていく上で、彼らに大道芸を1回やめさせないと駄目だよ」「青葉公園って市の管轄の場所があって、ここなら時々はできるんだから。」「私たちが管理するからそこでしかやらせないようにすればいいじゃない。」

というNPOスタッフたちの気運と、道路使用許可を取るなら現場の大道芸人で守りながら道路使用で動いていくべきだという彦さんの意見。発起人の彦さん1名 vs その他大勢みたいな構図になっているわけです。初めて行った会合がそういうちょっと悲しい状況で、これは人任せにははいけないなとその時初めて思いまして、私は会のメンバーに入ることにしました。

実際このしまる会の当時のメンバーたちも「やれやれ…。もうお前とは一緒にやっていけないよ」という雰囲気でした。なので、会のメンバーに入った当時は会合とは名ばかり、私と彦さんの2人で向かい合って「今日の会合を始めます」ということがしよっちゅうでした。

この時に、彦さんからいろいろなお話を頂くわけです。私は本当に学生ノリでやっていただけで、なんの考えもありませんでした。今もまあ微妙なとこなんですけど…さておき、当時彦さんが強く言っていたことの1つが「静岡で大道芸文化を根付かせていくためには、場所を作らなければだめだ。そのために公的な機関と話していく必要がある」というものでした。「大道芸というソフト面が育つにはハード面の整備がどうしても必要。そこは俺がやるから、お前は現場を頑張ってくれ。」というような話をしていました。

ご経験がある方もいらっしゃるかもしれませんが、公的な機関といっても役人さんですので、その時に権力を持っている方が話のできる方じゃないと物事が前に進まないんですね。静岡は保守的な傾向が強い場所なので、タイミングを待つし

かなかった状況があったのですが、幸運にも静岡市、そして一番大きな壁だった警察の方で、大道芸に好意的で前向きな方が着任されたタイミングが来たんです。

大道芸新聞の発行と歩行者天国

ちょっと、しまる会の発足後に話を戻しますね。会合の時に大道芸の情報発信をしていく必要があるという話が出て、そのために何か形になるものを作ったほうがいい、だったら新聞がいい、と当時のメンバーが決めたそうです。

記念すべき第1号は、会の発足から9ヵ月後に発行されました。その後も年に4回の発行を今2014年に至るまで欠かさず続けております。今日、皆さまのお手元に「大道芸新聞」というちょっと得体のしれないもののバックナンバーをお渡ししていますが、今ではカラー刷りの冊子状になっております。

またお話を戻しまして、会の発足から4年後の第15号をご紹介します。



その4年後に、先ほど触れた公的機関との話がついにまとまりました。彦さんは国内初ではないかとおっしゃってましたが、大道芸の使用目的で道路の使用許可が下りて、大道芸に静岡市の歩行者天国が開放されました。

でもこれは限定的なものでした。「歩行者天国に関わってくる商店街の承諾書が必要なので、これを必ず添付してください」というのが条件でした。少しずつ賛同してくれる商店街も増えて、最初は1ヵ所だけだった商店街も2ヵ所、3ヵ所と増えて参ります。

そうして、念願の道路で大道芸を堂々と行える環境が整いました。1年間ほぼ欠かさず、毎週末に誰かしら、地元の芸人さんだったり、愛知県や長野県内の若い芸人さん(主にジャグラー)が

来てやってくれました。ずーっと継続して日常的な大道芸ができる場所が、やっと確保できたんです。

彦さんの退任と残された課題

ただ、私の中でこのままではまずいな、と思ったことがありました。何かといえ、1つはこの歩行者天国道路が開放になった年に、会の発起人である彦一団子の彦さんが退任されたこと。ご自身は「大道芸は副業で、俺が本当にやりたいことは和菓子職人だ」と、仰ってまして。実際にその通りで、一貫してぶれてないんですが「東京の調理師学校に和菓子修行のために俺は行くよ」という風に…まさに彦さんの口癖でもあった“ハード面を整える”という使命を果たして旅立たれて、私たちは残されたわけです。

それまでの1年間は、町の人にアンケートをとりながらやってきたんですが、最初にお話したように、ワールドカップのワクワク感を演出するためには日常的な大道芸の場を作っただけではどうしても至らないんですね。やっぱりこの町にワクワクした感じ、何か楽しいことを見つかる好奇心が全然うずまいてないんです。当時は名古屋の大須商店街で同じように、NPO法人が環境を整えて週末に大道芸ができる場所を作っていたのですが、当時の駆け出し大道芸人はよく掛け持ちをしていたんです。それでよく大須と比較されました、静岡は人が集まらない、盛り上がりがない、お金も入らない、と3拍子揃っていたと…。

だから非常に厳しい状況ではあったんです。そこで、なにか打開しなければならぬなと思って、私なりに考えました。当時も大道芸新聞の発行は続いていましたが、年4回発行ではこの当時のスピード感に情報がついていけてないところがあったんです。そこで、しまる会とは別の新聞のようなフリーペーパーを私が自費で作るようになりました。



B5の紙1枚に両面刷りで、静岡ではこういうことが始まっているよ、どういこうで見れるよ、パフォーマーを募集しているよということ。それから広告と人材も募集しているよ!といった情報をギュッと詰め込んで、大道芸の後にお客さんにフリーペーパーを配ったんです

…で、この成果はほとんどなかったです。リアクションもなかったですね。これ第6号と書いてありますけど、この第6号が最終回となりました。

初めてのイベント企画

そこで。初めての企画だったんですけども、この歩行者天国で「ものまね大道芸フェスタ」というイベントをやりました。その様子が下の写真なんですけど、これですね。この写真だけお示しても伝わらないと思うので補足説明をいたしますが、これ私です(笑)。

このフェスタの趣旨はですね、4人の演者が、お互いの演目をシャッフルして違う人の演目と衣装と演出でやる。というものでした。もちろんお客さんにとってみれば当たり前ですけど、誰があるで誰が誰とかわからないわけです。誰がものまねしようが正直関係ないし、どうでも良いことなんですけど、でもこのイベントは盛り上がりました。何が違ったかと思うと、演者側の緊張感ですね。「今ここでやんなきゃいけない。」緊張感が良かったんじゃないかとあとになって思っております。

びっくりクラウンストリート

それで私は味を占めました(笑)。やはり普通の大道芸だけじゃダメだと、週末の大道芸に時々「おっ!?!」と通行人が振



り向くような仕掛けをしなきゃダメだ、ということに気が付きました。

そして2006年から何回かやった企画として、しまる会で管理できる商店街の中を全て会場にして「びっくりクラウンストリート」というものがあります。静岡の大道芸ワールドカップには市民クラウンと

いうボランティアスタッフがたくさんいます。この市民クラウンさんに声をかけまして、ワールドカップじゃない日常の静岡でも、このメイクして街中で遊ぼうという相談をしました。

それで何人か声を上げてくれて、回数を重ねながらですね、10~15人が参加するイベントになっていきました。実際これはクラウンさんがショーをするとい



うより、本当に街に出て通行人の人にグリーティングをする。挨拶したり、握手したりとか、リアクションで遊んでくれる役をやってもらって。他には、この市民クラウンが持っている演目があるのでスポット的にダンスを踊ってもらいました。3分位でしたけれど、これをけやき通りという大道芸の会場で行っていたら、非常に盛り上がりまして好評で良かったです。こういうノリで時々「びっくりクラウンストリート」みたいなイベントを実施することにしました。

あとこれの何が良かったかという点、チラシができるんですね。そしてイベントのチラシができることによって、商店街に挨拶に行くきっかけができます。そういうやり取りをすると店主さんからリアクションを貰えるんです。どうだったよとか、頑張ってるねとか。いろいろな声を直接いただけるきっかけとして、チラシは良いなと思いました。

試行錯誤のイベント企画たち

それでさらに味を占めてどんどんどんどん悪ふざけを続けました(笑)。

①非曲芸フェスタ

エロティックサマーナイトという副題は名前だけでエロくない催しでした。青葉公園という静岡市の管轄の場所で、ジャグラーさんに声を掛けて「ジャグリング以外の演目をしてください」というひどい宿題を課しました。もしジャグリングを1秒でもやったら罰金ですよ、というルールでこの催しを呼びかけたんですが、何人か手を挙げてくれました。

たとえば、曲芸を封印されて「超能力ショー」というのをやった方もいれば、「ドンキホーテとかに売ってる馬面にレインボの前身タイツをつけて公園を走り回る」という芸をしてくれた方が居たり。あえて罰金を払うためにジャグリングをやって、どんどん罰金としてお客さんに投げ銭をしていくという...そういう遊び心を持った芸人さんもいました。

みんな試行錯誤して非曲芸を成立させるべく、なんかそういう面白いことをやってくれましたね。これはこれでイベントとして面白かったですけど、二度目はなかったですね(苦笑)。

②音楽+大道芸合同ライブ

これは後のイベントに続く出来事で、紺屋町名店街というところでやりました。このイベントには目的が2つありまして、1つは大道芸の現場に路上ミュージシャンを招いて一緒に盛り上げていきたかったこと。そして1つは、当時紺屋町名店街にあった西武百貨店が閉店していて、そのあとどうなるかも全く見通しが立たない中で、しまる会に「旧西武前でもなんかやってくれないか」と相談が来ていたんです。

それに応じる形で、だったら何かイベントにしましょう！ということで、私の少ないコネクションの中で静岡市内外でやっている仲間たちに声を掛けてミュージシャンの方と一緒にやりました。人気のあるミュージシャンも出てくれていたり、「道路使用許可的にはグレーゾンドよ」

と言われた地下で切り絵のショーをお客さんに向けてやったりしていました。そうしたさまざまなかたちでイベントや合同ライブを旧西武前でやって、大道芸の場所としてやっていきたいという提案をさせてもらいました。このイベントは幸いにも続くことになり、毎月なにかしらやりました。



少し話がそれますが、これは私で、野菜ロボくんという遊びの芸です。顔がダンボールと野菜、目がピーマンで鼻が人参で、耳が白菜で、頭が大根なんですね。眉毛が葉っぱでした。で、よく見るとですね、口だけ本物なんです。唇だけ私でした。こういう気持ち悪さが子供たちに結構受けて、かっぱえびせんとか食べさせてくれたんです。

これは今日一番最後に改めて話をさせてもらいますけど、さらに、この野菜ロボに仲間を作りました。お祭りの中で子供たちに実際にこの顔を作ってもらって、2005年頃に「みんなで被って行進しよう！」というのをやったんですが、思いのほか子どもたちが乗ってきました。この通りは普段は本当に人が通ってなくて、この通りの隣で遊んでいた子どもたちをひっつけた感じです。

大道芸の邪魔をしてしまったところはあるんですけど、これがさらに発展して大道芸ワールドカップの期間中にやりまして、それもなかなか大盛況でした。

非曲芸フェスタ
E・S・N
エロティックサマーナイト 2006
出演者 NAOKI ももっち もーちゃん あまる 一輪
http://yamaru.kt.fc2.com

音楽+大道芸 合同ライブ
紺屋町名店街
17
18
24

スタジオ
静岡市紺屋町名店街に
定かめられる
会場
時間
出演予定

プリント
会場 静岡市 10/8
PM2:00~ 5:00
http://www.geocities.jp/shizuoka_simarukai/

コント大道芸フェスタ
11/23
http://www.geocities.jp/shizuoka_simarukai/

③スタチューフェスタ

6月には銅像のまねをして街の中で並ぼうという企画を立てました。当時は“スタチュー”という言葉にピンとくる人があまりいなかったの、チラシに「彫像、銅像の意」という注釈を書いています。

写真でお見せすると説明しやすいのですが、こういう黒い服を着た人とか、白い服を着た人とか、あといきなり現れたスパイダーマンとか(笑)。もう、ちよつとノリですね、乗っかってくる人は全部ウェルカムで受け入れました。



いろいろな人が並んでいて、これも同じ西武前や地下街だったんですが、なかなか好評で良かったです。

④ハプニングストリート

10月の企画ですが、スタチューフェスタをやった時に、スパイダーマンが面白かったんですね(笑)。意外と。なんだかんだスパイダーマンに持ってかれるなあというところがあったので、じゃあみんなで動こうかと。変装して会場を歩こうというロービング企画を立てました。やっぱりスパイダーマンも来てくれました(笑)。



変装した人同士が動き出すのは結構ドラマティックで、偶然の出来事も多くて面白かったです。ハプニングストリートもなかなか盛り上がりしました。

⑤コント大道芸フェスタ

あと、私が個人的にちっちゃい劇場、小屋芸が好きだったんです。役者さんが

やる20~30人規模の劇場で、演劇のライブを見るのが好きで、彼らは本当に面白くて。役者さんにもちよつと路上で何かやってほしかったんです。そこで大道芸の会場で役者さんに寸劇というか、コントをやってもらいました。あとは、市民クラウンさんがクラウンコントを持ってきてくれました。5分くらいのもなんですけど、パターンがいくつかあって、幕間のつなぎに非常に効果的でした。

テントを控室代わりに用意して、一応舞台っぽく演出しなきゃいけないと失礼かなと思って暗幕を準備したんですけど、かえってちよつと汚らしくなっちゃったというのがありましたけど…とりあえず幕を作りました。

個人的に思い出深いのは「伽藍博物館」という市民劇団を呼んだことです。今は解散しちゃてるんですけど、彼らはよくユニットライブでインプロのショーをやっていたんです。お客さんからお題をもらって、お題をドラマにしてなんかやるというのがすごく好評で。昔、ワールドカップの中でSBS静岡カップというのがあったんですが、そこでも大道芸として優勝しているんです。これが実現したことで私はすごく感謝しておりました、1人で。

しまる会退任と「あまるラボ」

その頃は、とにかく次から次へと「街中では何やっているかわかんないよ!」というつもりで、手探りのイベントをやっていました。

しかし私はあることに気が付いたんです。私自身、大道芸で身を立て始めた頃だったのですが、いろいろイベントをやっていると自分の芸が何も磨けないということに、このままじゃまずいなあと、一応いろいろイベントは立ち上げたからあとはみんなに任せよう、と私は一度代表の座から降りました。非曲芸フェスタで馬を被って走り回っていたももっちくんが代表を任せて、私は自分の芸を磨くために会のバックアップに回りました。

大道芸関係の方も今日会場にいらっしゃるので、こういう話をするのもあれなんですが、大道芸って結構難しいんです。お客さんに足を止めてもらって、興味を持ってもらって、拍手もしてもらって、ゆくゆくはお金も入れて頂くと。これ結構大変な作業なんですよ。でもそれを上手くやる人はやっぱりいるんです。

それでその当時の私が危機感を持ったのは、上手い人のまねをみんなしちゃう

んですよ。こうすれば人が集まって、こうすればお金は入って…教科書があるわけじゃないですが、大道芸のやり方みたいなものがなんとなく出来上がりがつつあったんじゃないかなと、感じていました。

これにならっていくと、私とその当時衝撃を受けた1人1人のドラマというところから完全に外れていってしまうんですね。演者1人1人がもうそれぞれの世界でそれぞれの面白いもので創っている世界で、じゃないほうに行ってしまうという危機感を持っていました。と言っても、私も大道芸が決して上手くないですし、説得力もなかったんです。

そこでなんとかして面白いもの、違ったアプローチで面白いショーを創っていかなくちゃいけない!という危機感を勝手に抱いて自主公演企画「あまるラボ」を始めました。このチラシは8回目の公演で、これはちょうど演劇的な内容になってしまったんですが、その当時の私の葛藤劇でした。



『傲慢なコピーロボットと理性だけの革命家』という題があるんですけど、この“傲慢なコピーロボット”というのはこのコピー大道芸人のことですね。これをモチーフにしてやりました。

彼らはとにかくすごいし上手い。でもすごいけれど話を聞いてくれない、かといってオリジナルで勝負してどうなるんだ。革命というか新しいものを創ろう創ろうと言ったって、面白いことは何もできない、という両極端なキャラクターを立てて、まさに私の葛藤を寸劇というかショーとして創りました。

このあまるラボの目的ももう1つありました。劇場でやる演目なので、お客さんは逃げられないんですね。つまり今、この会のような状況です(笑)。

私が喋っていることに対してつまんなかったらどうしよう、と思っても逃げられない状況というのはあると思うんで

すよ。そういう中で「お客さんから正当な評価を得た演目は、その時に初めて大道芸でやろう」「ここでとにかく何かを創って大道芸に還元していこう」というつもりでやっていたんですけど、なかなか上手くいかなかったというところがありました。

チーム・みかん遊演団

ちょっとNPOから逸れて、私個人の話になってますが、お話進めさせて頂きます。それですね、もう1つ。こういうあまるラボの活動をしながら気が付いたのは、しまる会から離れるとイベントごとがなくなっちゃったんですね。それは仕方がないんですが、そういう道筋をちゃんと作れなかったこともあって、せっかく一緒にいろいろやってきた人たちともう一度街中で何かをやるきっかけを作ることになりました。

そしてひとりでは、体力的になかなか難しかったので、だったらチームにしちゃおうと。自分の小さいコミュニティの中でですけども、知り合いの演者に「みんなですペシャルチームを創ってスペシャルなショーを創ろう」と呼びかけました。

それでできたのが「みかん遊演団」、というチームです。ただ残念なことに、私も呼びかけて気が付いたことなんですけど、やっぱり自分の世界を持っている人はこういう呼びかけには応じません。たとえば、極端に言えば私より強い人は絶対私の呼び掛けには応えてこない。ということに、やってから初めて気が付いたんです。

結果的に、私のスペシャルなショーをやるよという呼びかけに答えてくれたのはこれからショーをやりたいと思っている人たちでした。なのでスペシャルなショーをつくるなど全然とんでもなくて、まずどうやってショーを創っていくかの世話役みたいになってしまったんですね。



これはみかん遊演団の写真です、別に意味は何もなかったんですけどみかんを被ってやってました。最終的にこれく

らいのメンバーに落ち着いたんですが、この私の後ろの人はのちに私の嫁になるHICkeeです。みかん遊演団をやったことで、彼女は大道芸新聞を見て来てくれました。まあこうやって、私は結婚することになったと(笑)。そういうこともあるんだなということですね。

最初は「ああ失敗したなあ」と思いましたが、でも結果的にこの時のメンバーが面白い活動を独自で始めていてとても心強いですし、この時のつながりは脈々と今につながっています。

みかん遊演団は2~3年で1回休止しましたが、私の新しいチャレンジとして取り組んでいた寸劇や無言劇をみかん遊演団の活動中に創っていたら、人数が増えてもドラマを仕立てるのがちょっとできるようになってきました。そこで、無言劇でサロン公演を企画してやるようになりました。



この「ワインと寸劇を楽しむ会」というのはレストランの中で持ち込みでやった演芸会で、お客さんは15人くらい。入場料も1,000円というものです。こういうことをたくさんやりました。ホームパーティーの中でもやったり、ライブハウスでやったり色んなところで持ち込み公演というのをやらせてもらいました。

このサロン公演の良いところは、終演後にお客さんと交流できることです。今までやってきたイベントと違って、逆に今度は私たちが逃げられない場。その分、集まってきた人たちから、いろいろな意見などを戴くことができました。

その時、大道芸というかこういった企画は、人が集まるきっかけを作れるんだなあということを1つ思いました。こういう小さな企画を、しまる会から離れている間にすごくたくさんやっておりました。

次の写真の場所は、ちょっと前に話題になった三保の松原があるところであ

す。本当の三保の灯台のふもとにあるような手作りのお家のドームハウスです。ご主人、奥さん、私とHICkee、最初に話した稲垣さんと、まあいろいろな人がここに集まっているいろんなことをやりました。



それと、このみかん遊演団の活動の中で次の活動への大きなきっかけになったのが、山田とうしさんというパントマイムの世界の第一人者の方です。私の嫁のHICkeeが山田さんのパントマイムのチームに所属していた過去があり、そういうご縁もありまして良いお付き合いをさせて頂きました。

その流れで是非静岡に来た時に公演をしていただけませんか、その脇を固めるかたちで私達にも手伝わしてください！となって、このサロン公演でやってきたことを集結させるようなかたちで、「山田とうしとみかんの仲間たち」という舞台公演を企画運営いたしました。これが非常に良かったんです。

お客様の反応も良かったんですが、一番良かったと思うのは舞台の制作に回った仲間たち、それから一緒に演技をしたみかん遊演団の仲間たちです。我々にとって、この距離感で山田とうしさんと同じもの、場所を共有して同じ舞台を創るという経験そのものがすごく大きなものだという実感があります。これはまたやりたいな、何かやりたいなと思って悶々としておりました。これが2010年12月5日のことでございます。

しまる会への復帰 —震災と「とんがりバザール」

翌年、震災がありました。大道芸のイベントなどは一回全部なくなってしまいました。大道芸に限らず、お祭りは全部なくなってしまったんですね。その時に、私はものすごく深く思い悩みました。

みなさんは戦略マップ、ってご存知ですか。よく企業が収益をあげる道筋を立てるために作るフローチャートですね。私はこれをずっと作りながら「大道芸っ

て社会の中でどういう役割を担っていたのか、どういうものだったのかな。」という部分を深く掘り下げていきました。

そうしたら、やっぱりみんなが下を向いて歩いていくじゃなく、明るく生きていくこと。なんか変な話ですけど、胸をはって明るく生きていこうじゃないか、そのためのきっかけとして、イベントや大道芸があっても良いんじゃないかと思いました。そのために縁日イベントを立ち上げることにしました。またほぼ時を同じくして、しまる会の代表にも戻りました。



この縁日イベント「とんがりバザール」といいます。居酒屋とんがり坊主というのが静岡市のちょっと郊外にあります。その駐車場が広くて車が10数台置ける駐車場です。そこで舞台を作って、色んな屋台を並べてやっておりました。

芸人さんにギャラは支払ったり支払わなかったりしてましたけれど、絶対に外さなかったのは出演してくれたり何かやってくれたりした人には、ビールが飲み放題。それだけは約束します！ということで店長と契約して、それだけを頼りにいろいろな人を巻き込んでおりました。

大道芸にはエアギターの人、曲ゴマの人、紙芝居の人とか、今までの活動で知り合った静岡の面白い人を集結させようという狙いがありました。

でも大道芸の演技はあくまで見世物で、このイベントでいちばん大事だったのは、集まってくるお客さんだったり、大道芸以外にお祭りを裏で支えるいろいろな人たち。その人たち1人1人が主役になるような、ちゃんとスポットを浴びるようなイベントにしよう、というのが最大の狙いでした。

なので、大道芸フェスティバルと同じように、屋台の人のそれぞれの味を、それ

ぞれのキャッチコピーで紹介させてもらったりしました。芸術屋さんとして似顔絵描きの人とか、きこりおじさんの焼きマシュマロ（これはマシュマロをグリルで焼くやつ）、竹パイプのおじさん、アフリカ雑貨の人、ワンコインマッサージとか、あまるの中古ジャグリング用品というのを販売したりとか。

いろいろな面白い大人がここに集まってくるよ、というテーマで月に1回、居酒屋さんの駐車場でやっておりました。



それでこの写真は2012年2月12日。この絵は、いつも画家の方が縁日の最中ずっと描いてくださったものです。そのときのテーマや気分が違っていたんですけど、子供たちが遊びで絵を手伝ったりしちゃって、それを作家さんも受け入れてやってくれたりして、こういうのが混在するのはすごく面白いと個人的に思いました。

残念なことに、この日が実質の最終回となりました。なんで中止になったかという、地域振興のつもりでやっていたんですが肝心のお隣さんから音の苦情が来ました。ちょっと地域振興がシャレにならないということで、居酒屋の店長にお隣さんと和解したらまた声をかけてくださいということで、今休止状態です。

こういういろいろな人たちを、こういうきっかけで寄せ集めてしまったんですけど、これで培った色々な関係は続いています。結果的にこれからお話しする次の活動に繋がってきております。

劇場・街中大道芸☆ピーク

これも2011年の時ですが、「とんがりバザール」をやっていたけどまた1つ気が付いてしまったのは、ここに来る地元静岡の市民パフォーマーよりもボン菓子屋さんだったり、絵描き屋さんだったり、似顔絵屋さんだったりスリランカカレーだったり、そういう人たちの方が明らかに人間として面白かったことでした。

これにはやっぱり敗北感…というか「このままじゃ芸人を名乗れない。」という危

機感を強く抱きましたね。大道芸人がショーをしている20分は華やかだったとしても、それ以外の時間に何も華がないんですよ。これじゃまずいな、ということで、彼らと自分自身を煽ることにしました。今、私を棚に上げましたけれど自分自身も含めて、僕らはもっと面白くなんなきゃダメだ、芸ももちろん人として。でもそれを誰に習えばいいの…と考えた時、先輩方がいるじゃないか。という結論に辿り着きました。

そして、これも先ほどの話に通じるんですが、震災があった時に悩んだ「大道芸って何の役に立つんだろうか」という気持ちを掘り下げていったとき。私は何を思ったのか、1回私この仕事で得たお金を全て使わなきゃいけないと思ったんですね。貯金を使い切る。この仕事で得たお金すべて違うかたちで還元しようと思う気持ちで立ち上がり、はじめた企画が「劇場・街中大道芸☆ピーク」でございます。

これがどういう企画かという、国内外で高い評価を受けたり、また私がお付き合いさせてもらっている大道芸の諸先輩方を静岡に招待して、大道芸と劇場の両方で公演をやって頂くというもの。これを半年間、月に1回のペースでやっておりました。

お呼びしたのはサンキュー手塚さん、三雲いおりさんによるクラウン劇団「Andalive」さん（メンバーはふくろうじさん、ふるえんぶていぶちっ。さん）にも来て頂きました。こういう公演をすることで、大道芸ってもっとすごいでしょ、夢があるでしょ、面白いでしょ。僕らはここを目指さなきゃいけないよ、と自分自身への鼓舞と仲間たちへのプレゼント（メッセージ？）のつもりでした。

最終回までいろいろな方をお招きしてやったんですけども、やはり無計算がたたって、大赤字でございました。この金額は言えませんけれど、でもやって良かったなあと思っています。

実際の様子を少しご紹介しますと、こちらは、ましゅ&Keiさんというミュージッククラウンペアです。ハンドベルを使ってすごい、でも技術だけじゃない面白いショーをされます。この方々が静岡で公演したことがないというふうなお話だったので、じゃあ是非やってほしいと私が無理を言って来て頂いて大道芸のショーと、劇場のシアター特別公演をして頂きました。



こちらは先ほどお話したクラウン劇団、Andalive、三雲いおりさん率いる素晴らしいチームです。東京公演を観に伺って、私の独断と偏見では是非静岡でもやってくださいという話をさせて頂いて、実現しました。



それで、この企画の酷いところはですね(笑)。この招待芸人の先輩たちに、片づけをさせているところです。写真は、ふくろうじさんに照明の片づけをして頂いているところです(笑)。そういうかたちで、出演者もスタッフもしっちゃかめっちゃかで。しまる会の面々も、準備から本番、撤収まで全部チームプレーをしながらやったんですね。



これをやることによって、しまる会としても非常に可能性を感じました。というのは、劇場公演に関してはみんな本当に素人だったのですが、この企画では手探りしながら照明音響や重要なオペレーションまで、基本的にはすべてしまる会がやっておりました。ですので、やる度にみんながステップアップしていくんですね。半年間毎月、6回やった中で確実に腕というかノウハウを知っていくわけです。

しまる会が「これから、そういう舞台公演の受け皿になれるかもしれないね」という状況の中で、沢入国際サーカス学校から「旅する道化師と大道芸人たち」という巡業公演を静岡でできないか？という相談を頂きました。そこで、今ならできると思ったので、やらせてくださいというお話を、静岡公演の準備をさせて頂きました。



あとは東京のパントマイムのチーム「maimuima」の公演を見に伺って、私が静岡でやってほしい気持ちを勝手に口走ってしまって、これも公演として実現するかたちになりました。

この「大道芸☆ピーク」とこの2つの公演を経て、しまる会は舞台公演の受け皿になれる可能性はあるし、実際できるなあという手ごたえをつかみました。

廿日会祭大道芸

いつの間にかだいぶ時間が過ぎました。どうも自分はいろいろ、公演とかイベントをどんどん企画してやっていく趣向があるみたいです(笑)。今日のお話は大体そういう内容になってしまっているんですけども、それがどういふところに集約していくかーというところを、結びとしてお話ししたいと思います。

これは去年のもので「廿日会祭大道芸2013」のチラシです。この廿日会祭というのは静岡の人にとって特別なお祭りの1つです。静岡市街から少し離れたところにある静岡浅間神社という神社の春の例大祭で、400年以上の歴史があるお祭りです。4月1~5日まで、曜日ではなく日にちでずっとやっています。

しまる会の発足した2001年当時からお付き合いのある商店街の方から、この廿日会祭の中で大道芸で賑わいづくり

をしてほしいという相談を頂きました。それというのも廿日会祭は歴史があるお祭りなんですけど、戦後「静岡まつり」という新しい市のお祭りが起こりました。2つのお祭りは並行して一緒に開催していたのですが次第に分かれたりして、結果的に静岡まつりを牽引していたはずの廿日会祭のほうに力が弱くなってきてしまっているという状況がありました。



実際に新しい法律ができたことやお祭りの屋台・テキ屋さんが年々減ってきていて、お祭りの風景というか風情がもうみるみるなくなっていく中で、大道芸でなにかできないかという相談を最初に頂いたのが2001年のことでした。それから、そのままずっと大道芸のショーをやってきたんですけど、なかなか集客が難しいというところがありました。

そうしたかたちで続けてきたなか、チラシの正面に「芝居小屋シアター」って書いてあるのが見えると思うのですが、こういうものをお祭りの中で構えるきっかけを2012年に頂きました。

浅間通りのすぐ前の門前町・浅間通り商店街という長い商店街のちょうど真ん中に、閉店してしまった呉服店さんがいました。お祭りのときに閉店しているのはさみしいからそこで何かやりたいねという話があったところに、サロン公演を方々でやっていて知り合ったあるお店のマスターから「浅間通り商店街の空きテナントで何かやりたいけれどアイデアがない」という相談がありました。

その頃、お店でやってたのは芝居小屋ライブみたいな名前だったんですけど「じゃあ芝居小屋にしちゃいましょうか。」ということで実際にはこういうかたちになりました。

呉服店の中を、お祭りの5日間だけ劇場にしちゃったんです。しかもその後判明したのですが、この呉服屋さんは病気で亡くなった静岡市の市議会議員さんのご実家だったんです。そして、その方が歩行者天国道路の大道芸について、市議会でのNPOの提言を持って行って話をしてくれた方だったんです。

当時はおかみさんがお店を守っていたんですが、そのおかみさんからお話を頂いてこれはやるしかない！と私は覚悟を決めました。ここで、自分たちもお祭りの元気を1つ創っていこうという思いでやりました。



今店の前でやっているのはアフリカ芸能のジャンベチームですね。そして入口の絵を描いてくれているのは、「とんがりバザール」で出会った地元静岡の造形作家さんです。これこれこういう話があって、みんなが振り向くようなすごみのある絵を芝居小屋に描いてほしい、と言ったらこれを作ってくれたんです。



どうやら河童が私で、左が HICKee のようです(笑)。この中にいる人たちも、私が写真を出した大道芸人さんをモデルにして描いてくれました。

こういう感じでどーんと出したら、やはり1年目は結構な話題になりました。あなにかやるんだね、ということで大盛況だったんです。この廿日会祭期間中の大道芸が10数年続く中で、ここまでの盛況というのは私も経験がありませんでした。こうやって、やっぱり何かがあった時に、どーんといくことはあるなという手ごたえを感じた企画でした。



そして実際の芝居小屋の中身をご紹介します。写真は昔語りの会という山梨にいる女性で、この絵は絵巻物になっていて、20mくらいずっと1枚絵なんです。これをぐるぐる巻きながら神話や古事記の話の4巻に分けて毎日1話ずつやっております。当時は第4巻までだったんですけど、今は第6巻までであるということで、ちょっとまた機会をつくって来て頂きたいなと思っております。

他にも、カンカラ三線の芸人さんにこの時だけ静岡に来てもらったり、地元のおもちゃ屋さんの協力で子どもたちにけん玉チャレンジしてもらったり。あと、知り合った人はどんどん誘ってしまう悪い癖があるんですけども、韓国のジャグラーに「日本でお祭りをやってるから遊びに来て」と言ったら本当に来てくれたのでショーをやってもらったり、本当にいろいろしました。



そしてこれは、芝居小屋シアターをはじめ2年目の時の新聞です。いくつか取り上げていただいたうちの1つなのですが、これはくす田くす博さんと私と HICKee の3人コラボショーをやっている時の写真ですね。私がもうやめることはできないと強く思った1つは、子供たちがものすごく乗ってきたことでした。たとえば極端な話、この子たちがこういう姿勢で見ようとする限り、どんな状況になっても、続けなきゃいけないと思っております。

ちなみに運営ですが、このお祭りは殆ど芸人さんへの謝礼がなくて宿は合宿ス

タイトルです。本当に失礼だと思うんですが「来てくれたら静岡のグルメで接待します」という話で依頼させてもらっています。この条件で芸人さんを招くために、私が商店街のみなさんに「毎晩誰かがみんなが興奮するようなものを持ってきてください」とお願いしたんですが、そうしたらですね、本当に持ってきてくださいました。すごい焼酎だとか、パン屋さんはパンを、お布団屋さんお米を持ってきてくれたり、組合の商店街の人がどんどん持ち寄ってくらさって。

それでも、芸人さんには「今年はお金を払いましたが来年は払えないかもいれませんが」と言っていたんですが、私が自費で色々やってしまうのを見かねた商店街の方が助成金を申請してくれて、年間予算を預けてくれました。「それでなんか面白いことやってくれ。」ということですね。そんなふうに一見何も変わらないんですけど、少しずつ変わってきている。そのためにはやはり期待に応え続けたいといけないうし、ルーティンワークにしちゃいけないとも思っています。毎年何かしらびっくりするものを準備しなきゃですね。

今年も4月が迫っております、当然祭りの準備をいましているところです。みなさんに今日ご案内できなくて申し訳ないんですが、近々明るい話題を振りまけたらなと思っております。

青空演芸会

最初はここまで今日は終わろうと思っていたのですが、あともう1つだけ最後のお話をさせてください。同じ商店街でやっている別イベント「青空演芸会」という企画で「とんがりバザール」でやっていたノリを商店街でそのまま流用しているようなものです。

ジャグリングの道具を子供たちに預けて道具をいじってもらって、学生やプロのパフォーマーに先生としてずっとしてもらおうという企画です。他にもヨガの人にワークショップをやってもらったんですが、そうしたらジャグリングに夢中になる子どもたちと、ヨガに見様見真似でチャレンジする子どもたちもできてきました。これは相当かわいかったですね(笑)。

次のページの右上の記念撮影写真に写っている、後ろに飾ってある絵は誰でも絵を自由に描けるお絵かきコーナーの絵です。段ボールの絵はまた造

形作家の方をお願いして、子供たちが遊べる段ボールをつくってもらいました。これを並び替えたりしながら絵を組み合わせた遊びなんですけど、こういうのを面白がってやってくれました。「とんがりバザール」はなくなりましたが、こうして違ったかたちでいろいろな町のお祭りの手伝いをさせてもらっています。

アトサキ大道芸

あとはアトサキ7という、静岡の街中・七間町にあった潰れた映画館の跡地で「空地の間も何か面白いことを。」という話があり、私がお手伝いさせてもらって「アトサキ大道芸」という企画をやりました。これは毎週水曜の日中に来れば大道芸人がいるよ、というイベントで半年間継続してやっておりました。(実は今年から建物が建ってしまうため今日が最終日で、仲間に任せて来ています。)

大学生ジャグラーにパフォーマンスしてもらったり、キックボクシングのワークショップやアクション俳優さんの時代劇の殺陣のワークショップをしたり。子供演芸団の子どもたちに風船のショーしてもらったり。あとは月に1回、芸人さんに持ち寄りパーティをしてもらいながら、遊びの延長でちょっと集まる会をやったりもしました。屋間からみんなお酒とビールとバーベキューをしながらお客さんと遊ぶという会ですね。すべて水曜日の昼間の風景で、もうなんでもありですね。

やっているのと、やはりこういう居場所を求める人が来てくれたりする実感がありました。いちばん最初に戻るのですが、大道芸を街中でやっていく中で、このお客さんのワクワク大道芸ワールドカップをやっている時のようなお客さん側の高揚感—が日常の静岡では無いね、という話をしました。そうした中での地道な活動になりますけれど、こうしてお客さんたちの新しい居場所を大道芸をきっかけに創っていければ、もしかしたら新しいワクワクを生み出すきっかけになるかなあと、思ってお手伝いさせてもらっています。

結びに代えて

これは別の新しい静岡の未来の話になりますが、三雲いおりさんの協力を得た市民クラウン出身の地元市民パフォーマーたちが、昨年初の自主公演を実現させました。これは私は一切関わっておりませんが、彼らの力で彼らが気づいた縁の中でこういうことをやりはじめたのはとても革命的なことです。

あと、お話しする時間がなくなってしまったのですが、いちばん下にある写真は「浮世離れの会」のものです。これは自分がいろいろと刺激をもらっている旅回りの芸人で、おいかどいちろうさんという方が地元でやっているお祭りの風景です。私はこの方からお祭りづくりについて本当にたくさんの刺激を受けています。

こうした話もぜひ、また別の機会にお話しできればと思っております。

*

それではこのあたりで、本日の私の話を終わりにさせていただきます。実は結びを考えてはいたのですが(みなさんにいろいろとお話をしていた中でお判りになったかもしれませんが)御覧のように私の活動はまだ道の途中です。

でも、これからまた面白いことが起こりそうな予感が、静岡のあちこちで今起こり始めています。静岡は面白くなる、1歩2歩、どんどん来てるな…という予感がございます。

みなさんにいつか静岡に遊びに来てもらった時に、街中の風景だったり、商店街の活気だったり、そういう面白い匂いを感じてもらえるように。これからも面白いことを企画運営していきたいなと思っております!!

長い時間になりましたが、ご清聴頂きありがとうございました。

